

カナダで育つ日本語背景の幼児の親が抱える課題解決に向けたネットワーキング

秋山 幸 (早稲田大学大学院日本語教育研究科)

石井 恵理子 (東京女子大学 現代教養学部)

1. 研究の背景と目的

言語文化圏を越えた親が、当該社会で子どもの成長・発達の支援をすることの困難さが指摘され (佐藤、2010 ; 南野、2017)、子どもの言語発達や教科学習を支援する実践は、行政、学校、NPO 等地域拠点の連携のもと進められてきた (佐藤、2010 ; 矢沢・高橋、2015)。しかし、支援にたどりつけない親、支援そのものがない地域も存在し、専門家養成や連携強化だけでは課題解決が難しく、制度の枠外にある人々の課題共有によるネットワーキングの検討が不可欠である。

本研究では、移民政策をとるカナダを調査地とし、日本語背景をもつ子どもの親に焦点を当て、親と周囲の人々による、子どもの言語を含む課題解決に向けたつながりの実践から、地域ネットワーキングの特徴を明らかにすることを試みる。この試みにより、制度の枠外にある子育て課題の対応にかかわる人々の実践を可視化し、地域全体の実践を捉える視点を提供したい。

2. 調査方法と分析方法

カナダのブリティッシュ・コロンビア州在住の日本語家庭の親に、子育てに関する質問紙調査を2016年9、10月に実施し (回収率72.4%、有効回答数110件)、合せて面接調査希望者を募った。面接調査は、調査趣旨と個人情報保護について説明し協力者の同意を得て、10人に実施した。調査時の音声は調査協力者の同意を得てICレコードに録音した。

分析では、親子が抱える課題に対する他者からの「越境行為」(エンゲストローム、2008)に着目し、他者の働きかけによって、行為の受け手(親)が実際に行動し課題の対処法を見つける、あるいは、仲間を得るに至るまでをデータの単位とした。親がつながる機関や人について、①種類と機能を抽出し、②それらにたどりつくまでに「越境行為」があったか、③「越境行為」の実践者が親とどのような領域で接点があり、どのような機能を提供するかについて分析を行った。

3. 調査協力者の属性と家庭内言語

調査協力者10名と7家庭の父親が移民背景を持ち、家庭内言語は成員間で異なる(表1参照)。

協力者	面接時代	調査協力者(子どもの母)				夫(子どもの父)			家庭内言語		
		滞在年数(年:月)	渡加経緯	滞在資格	母語	母語	出身	母子間	父子間	夫婦間	
A	40代	13	配偶者事情	移民	日	タガログ、英	フィリピン	日	英	日	
B	40代	1:8	配偶者事情	移民	日	広東	香港*	日	日>英	日、英	
C	30代	2:3	配偶者事情	就業ビザ(家族)	日	日	日本	日	日	日	
D	30代	0:8	配偶者事情	移民申請中	日	マンダリン[ハイナン]	マレーシア*	日	日	日、英	
E	40代	14	W.H.・仕事	移民	日	英	カナダ	日>>英	英	英	
F	50代	25	仕事	市民権	日	英	カナダ	日	英	英	
G	40代	17	結婚	移民	日	英	カナダ	日	英	日、英	
H	30代	11	W.H.・仕事	移民	日	広東	香港*	日	広東>英	日、英	
I	40代	18	家族で移民	移民	広東	日	日本*	日	日	日	
J	40代	10	留学・仕事	移民	日	英[ギリシャ、仏]	カナダ**	日	日	英	

W.H.:ワーキングホリデー制度の利用 []:年少時の家庭の言語 *:親とともに移民 **:親が移民 >:左辺が多い >>:左辺が圧倒的に多い

4. 分析結果と考察

親がつながる人や機関は、公的専門機関、民間機関、私的支援者に3分類できた(表2)。また、機関が有する機能は、言語発達・医療、子ども、移民、日本語教育など個別の支援目的を持つが、

私的支援者の持つ機能は、親子を該当する機関につなぐ、私的つながりのコミュニティ内で課題を共有するという機能を持っている。私的つながりは、複数の課題に対応する機能を有している。

越境行為には、専門家の働きかけと家族・友人・教会の仲間等からの働きかけがあり、後者は偶発的に機関やサービスにつながっていた。①多方面の働きかけを得る、②働きかけをほとんど得られない、③ある基盤となる集まりから複数の働きかけを得るという3タイプがあった。①②は、日本での子育てとの連続性が断たれ、情報や支援がすぐに必要な親たちであった。②は、移民向け制度の対象の外にあるという特徴があった。③は渡加して子育てまでに時間があり、かつ、異年齢の子どもをもつ家族とつながることで意図しなくても徐々にさまざまな情報を得ていた。

表2. 協力者がアクセスする支援機関の種類および支援機関・支援者の機能数

協力者	渡加時 子ども年齢	公的専門機関				民間機関		私的支援	支援機関・支援者	
		言語 発達	発達 医療等	子ども/親子向け プログラム	移民向け サービス	子ども日本語 サークル等	日本語学校 プリスクール	夫・夫家族・教会 近所・友人等	種類 (数)	機能 (数)
A	0(10カ月)	◎	◎	◎	◎	—	○	有	5	7
B	3,1	◎	—	◎	◎	◎	○	有	5	9
C	3,1	—	—	●	—	◎	●	有	3	4
D	7,6,1	—	—	—	—	◎	◎	—	2	2
E	—	◎	—	—	—	●	○	有	3	6
F	—	◎	◎	●	—	—	●	有	4	6
G	—	—	◎	—	—	—	○	有	2	6
H	—	—	◎	—	—	◎	○	有	3	6
I	—	◎	—	●	—	—	●	有	3	6
J	—	—	◎	—	—	—	●	有	2	8

◎:越境行為者がいた ●:自分で見つけた ○:経緯ははっきりしていないが行った —:行っていない

5. 結論と課題

移住の直後は多方面の即興的つながりが、中長期的には個別の課題に特化しない緩やかなつながりが求められる。親が課題を共有する仲間や支援にアクセスするために、制度の枠外の人々を含むつながりが不可欠である。親子のサポートにおいて、支援拠点の役割よりも人の越境行為という実践に着目すると、偶発性と即興性を備えた動的性質を持つ地域全体のものとして捉えることができる。今後は、子育ての動的ネットワークにおいて、親の実践活動を通じた他者との関係構築プロセスを探ることを課題としたい。

【引用文献】

エンゲストローム, Y. (2008) 山住勝弘訳「拡張的学習の水平次元—医療における認知的形跡の編成」山住勝弘・エンゲストローム, Y.編著『ネットワーク：結び合う人間活動の創造へ』新曜社、pp.107-147

佐藤郡衛 (2010)『異文化間教育：文化移動と子どもの教育』赤石書店

南野奈津子 (2017)「移住外国人女性の子育て困難とサポートネットワークに関する研究」『社会福祉学評論 18号』日本社会福祉学会関東部会、pp.1-11

矢沢悦子・高橋悦子 (2015)「大和プリスクール『にほんごひろば』—小学校入学前の多様な言語背景を持つ子どもたちへの就学前教育・保護者支援—」『異文化間教育 41号』異文化間教育学会、pp.16-31

付記

本研究は、科学研究費助成事業（基盤 B）「複数言語背景の子どもの日本語支援を支えるネットワークに関する実践的研究」（研究代表者：石井恵理子）による研究の一部である。調査にご協力いただきましたみなさまに厚く御礼申し上げます。